余命宣告を受けたので私を顧みない家族と婚約者に執着するのをやめることにしました2

登場人物紹介



ベンジャミン

アゼリアと同じ教会で幼少期をともに過ごす。弁護士。

オリバー

アゼリアと同じ教会で幼少期をともに過ごす。新聞記者。

ヨハン

アゼリアのかかりつけの町医者。真面目で努力家。貧しい人々のために無償で治療もしている。

カイ

心優しく思いやりのある性格。フレーベル家の御者でありながら唯一アゼリアに優しかったが……？

ケリー

アゼリアと運命の出会いを果たし、個人的に雇われている専属メイド。明るく元気な性格で家事が得意。

マルセル

アゼリアの元婚約者。責任感が強い性格で、両親をとても尊敬している。

アゼリア

元フレーベル伯爵家の令嬢。余命宣告されたことをきっかけに、どん底の人生をリセットしようと決心。ヨハンの診療所で心穏やかに過ごしている。

目次

余命宣告を受けたので私を顧みない家族と婚約者に執着するのをやめることにしました2　7
番外編①　ケリーの手紙　269
番外編②　マルセルの手紙　273
番外編③　君の名を残して　279

余命宣告を受けたので私を顧みない家族と婚約者に執着するのをやめることにしました2

第一章　三人の最後の晩餐

空がオレンジ色に染まるころ。

私――アゼリアはガラガラと音を立てて走る馬車に揺られていた。

今、乗っている馬車は、二十年ぶりに再会できた、お父様が用意してくれた上質な馬車。とても立派な内装で、座椅子も柔らかくて座り心地がいい。エテルノ侯爵家の財力の高さが窺える。

「さすが、お父様が用意してくださった馬車ね……これなら身体に負担がかからないわ」

背もたれに寄りかかると、そっと目を閉じてこれまでのことを思い出す。

教会前で拾われた私をフレーベル家の義両親が引き取り、冷遇され続けた日々。

婚約者のマルセル様からも冷たくされ、唯一の希望の存在がメイドのケリーと御者のカイ。カイは私に親切にしたせいで、鞭打ちされたあと行方不明。

そのあと、私に対するフレーベル家の仕打ちはますますひどくなっていった。ケリーがいなければ、私はとっくに飢え死にしていただろう。

そうして今年の四月に、突然の鼻血と貧血。

診察してくれたヨハン先生は、グリーンヒル教会で私を可愛がっていてくれた人だった。病名は「白血病」、私は自分が余命半年だと告げられてしまった。

病気で弱っていたある夜、帰宅が遅くなった私を待ち受けていたのは屋敷からの締め出し。暗闇が怖くてガス灯のある噴水に向かったところ、そこで気を失い、目覚めるとマルセル様に助けられていた。

そのあと、マルセル様に婚約破棄を願い出て、ケリーと共にヨハン先生のところに身を寄せて穏やかな暮らしを手に入れたのだった。

余命半年と告げられた私の願いは、本当の両親に会うこと。行方がわからなくなったカイを捜し出して「ごめんなさい」と謝ること。

そして今日――私は初めて念願だった両親と会うことができた。

「あとは、カイを捜すことだけね……。それが叶えば、私は心置きなくこの世を去ることができるわ」

目を開け、オレンジ色に染まる空を見上げた。彼の優しい眼差しを思い浮かべながら――

◇　◇　◇

「ただいま……」

ガチャリと扉を開けて家の中へ入ると、どうやらケリーは厨房で夕食の支度をしているところのようだった。
「アゼリア様！」
ケリーは食事を作る手を止め、私のもとへやってきた。
「アゼリア様、ご両親には会えたのですか？」
「ええ、会えたわ。それで……」
そのとき一瞬眩暈（めまい）が起こり、ケリーが支えてくれた。
「アゼリア様、お疲れのようですよ？　それになんだか顔色が優れないようですし」
ケリーが私の顔を覗き込んでくる。
「え？　そうかしら……？」
今日は両親と会うために二回も長距離移動している。
そのうえ、両親と一緒に暮らすことについて、ケリーとヨハン先生にどうやって切り出せばいいのか頭を悩ませていた。精神的にも肉体的にも疲れて当然かもしれない。
お父様には今夜はエテルノ侯爵家に戻ってこなくていいと言われているし、今後の話をするにはヨハン先生とケリーが揃ったときのほうがいいかもしれない。
「わかったわ。それじゃ夕食まで部屋で休ませてもらうわ」
「はい、ゆっくり休んでください」

笑顔のケリーに見送られ、自室に戻ると、私物の片付けを始めた。といっても荷物はほとんどない。何日分かの着替えと数冊の本。それが私の持ち物すべてだ。
荷物をまとめ、改めて部屋を見渡す。
マルセル様に助け出されて、この診療所にお世話になって半月。穏やかな時間を過ごすことができて幸せだった。
両親と一緒に暮らしたいのは当然だ。
その反面、今の生活が終わってしまうのも悲しかった。
だけど、いつまでもヨハン先生のお宅でお世話になるのは正直、心苦しかった。入院費すら取らずに私をここに置くのは、ヨハン先生の負担だったはず。
「ヨハン先生には……きちんとお礼を言わないと……」

十八時半。
――コンコン。
ベッドで横になっていると、扉がノックされ、ケリーの声が聞こえてきた。
「アゼリア様。起きていらっしゃいますか？」
「ええ。起きてるわ」
「ではお食事の用意ができたので降りてきてください」

「ありがとう」
ゆっくりと起き上がり、室内履きに足を通して部屋を出る。階段の手すりに掴まり、降りていくと食卓にはすでにヨハン先生の姿があった。
「アゼリア、今日はごちそうだよ」
ヨハン先生が笑顔で声をかけてきた。
「え？　そうなのですか？」
首をかしげると、ケリーが大きなお皿の上に載ったローストビーフを運んできた。他にもパイ料理やサンドイッチ、彩りのいいサラダが並べられる。
「すごいわ……まるで今夜は何かのお祝いみたいですね」
ヨハン先生がうなずいた。
「それは当然だよ。アゼリア、君のご両親が見つかったんだろう？　それに、三人で一緒に食事をするのは今夜が最後になるからね」
「え……？」
その言葉にドキリとしてヨハン先生を見ると、ケリーが口を開く。
「それよりもまずは、みんなで食事をしながらお話ししませんか？　アゼリア様、今夜は腕によりをかけて料理を作ったのですよ」
「そうね。どれも美味しそうね」

「それではいただこうか」
「「はい」」
ヨハン先生の言葉に私たちはうなずき、三人の最後の晩餐が始まった。
「アゼリア、実は昼休みにエテルノ家から電話をもらったんだ。電話のお相手はアゼリアのお父さんだったよ」
食事を進めながらヨハン先生が教えてくれる。
「え？　そうだったのですか？」
「うん、それで……アゼリアと一緒に暮らしたいとお願いされたんだよ」
「！」
思わずピクリと肩が跳ねた。まさか、もう伝わっていたなんて……
ふたりは、どう思っているのだろう？
そう考えていると、ヨハン先生は言う。
「アゼリア、僕はそれがいいと思うよ？」
「はい、私もそう思います。だって、やっと会えたのですよ？　絶対にアゼリア様はご両親と一緒に暮らすべきです」
「で、でも……」
私が出ていったらケリーが……。思わずケリーをチラリと見る。

「アゼリア様、私のことは気になさらないでください。私は今ヨハン先生のお宅で働けて毎日がとても充実しているのです。ヨハン先生はずっとここで家事手伝い兼、診療所の助手として雇ってくれるそうなのです。だから私ならもう大丈夫です」
「そうだよ、アゼリア。僕たちに気を遣っていたら、一生両親と暮らせないよ。もうわかっているとは思うけど、僕はアゼリアに後悔してほしくないんだ。なぜなら……」
そこでヨハン先生は言葉を切る。その次の言葉は聞かなくても十分わかっている。
私の命は残り数か月なのだから――

今夜は三人で過ごせる最後の夜。なので、食後にみんなで一緒にヨハン先生の特製ハーブティーをリビングで飲むことになっている。
夕食を終え、初めて厨房に立って、ケリーと一緒に後片付けをした。ヨハン先生も手伝ってくれた。
――ジリリリーン！　ジリリリーン！
突然、診療所で電話が鳴り響いた。
「おや？　こんな時間に誰だろう？　ひょっとしてマルセル様かな？」
ヨハン先生が私を見つめる。
マルセル様が私に電話を……？

「さぁ……どうでしょうか？　心当たりがないのでなんとも言えませんが……」
「とりあえず電話に出てくるよ」
ヨハン先生は拭いていたお皿をテーブルの上に置き、診療所へ向かった。
疑問に思いつつも、私はケリーと後片付けを続ける。
「ケリー、このカップはどこへしまえばいいのかしら？」
「はい、アゼリア様の後ろにある食器棚の上から三番目の右側です」
食器を洗いながらてきぱきと答えるケリー。言われた場所にはたしかに同じカップが置かれている。
「すごいわね、もうすっかりこの診療所の人ね？」
「ええ、そうなんです。最近ヨハン先生は、もうケリーなしではこの診療所は回せないなって言ってくださるんですよ？」
うれしそうなケリーを見ていると、思わず想像してしまう。
ヨハン先生とケリーが結婚して夫婦としてこの診療所をやっていく姿を。
ケリーは、まだ十七歳だけど家事も得意だし、しっかりしている。そしてそんなケリーをヨハン先生は何かと頼りにしている。
ふたりは十二歳の年の差があるけれど、きっとお似合いの夫婦になれる……そんな気がする。その未来図を想像するだけで頬がゆるむ。

「どうかしましたか？　アゼリア様」
ケリーが首をかしげる。
「あのね、きっとケリーは可愛らしいお嫁さんになれるだろうなって思ったのよ」
するとケリーは真っ赤になった。
「ア、アゼリア様……突然何を言い出すのですか？　でもアゼリア様だって……」
言いかけてケリーは口を閉ざした。きっと言ってはいけないことを口にしてしまったと思ったのだろう。
気にすることはないのに。何か声をかけてあげないと……
「あのね、ケリー」
そのとき。
――ドンドンドン！
勝手口からノックの音と同時に、声が聞こえてきた。
「ケリー。いるんだろう？　俺だよ、オリバーだ」
「え？　オリバーさん」
突然の来訪者に驚く。かつてグリーンヒル教会でヨハン先生と一緒に育ち、赤ちゃんだった私を可愛がってくれたオリバーさん。今は新聞記者として働いている、とても忙しい人だ。それなのに、こんな時間に……？

「はーい、今開けます！」
食器洗いを中断してドアを開けに行こうとするケリーを止めた。
「待って、ケリーは手が塞がっているでしょう？　私が開けに行くわ」
「よろしいですか？　では、お願いします」
「ええ。行ってくるわね」
私は勝手口の扉に向かう。
カチャリと扉を開けると、そこには街灯に照らされたオリバーさんが立っていた。
オリバーさんは、私が扉を開けるとは思わなかったのか驚いている。
「あれ？　アゼリア。ひょっとしてまだ食事が終わっていなかったのか？」
「こんばんは。いいえ、食事はもう終わりました。でも、どうしてですか？」
「いや。食事が終わっているなら、もう部屋で休んでいるだろうと思ったからさ」
「今はケリーと台所の片付けをしていたところです」
「ふ～ん。そうだったのか。まぁ、いいや。入らせてもらうよ」
オリバーさんは勝手口から厨房に入ってくると、ケリーに声をかけた。
「よっ。ケリー」
「こんばんは、オリバーさん」
ケリーは食器を洗いながら笑顔でオリバーさんに挨拶する。

「ところでヨハンはどうしたんだ？　リビングか？」
オリバーさんはキョロキョロ辺りを見渡した。
「いえ、ヨハン先生は診療所で電話が鳴ったので取りにいったのですが……」
なんだろう？　妙に遅い気がする。
「そういえば、ずいぶん電話が長いですね？」
ケリーも私と同じことを考えていたのだろう。
そこへヨハン先生が戻ってきた。
「あれ？　オリバー。来てたのか？」
「ああ。たった今来たところさ。アゼリアに用事があって来たんだ」
オリバーさんは私をチラリと見る。
「え？　私に……ですか？」
「ああ、そうさ。ほら、王太子様のインタビューの話をしただろう？　写真を撮ってきたから持ってきたんだよ。本当は新聞記事に顔写真を載せたかったけど、王太子様が記事は載せてもいいけど写真はやめてほしいって言ったから写真掲載はボツになったんだよ」
「ボツに……？　どうして写真はだめなのでしょう？」
「さ、さぁ……？」
ケリーが首をかしげる。私も理由がわからなかった。すると、オリバーさんが教えてくれた。

「それはな、この国の王族は全員が、王位継承権を持っているんだよ。そして、正式に王を継承することが決まるまでは、あまり公にしないことが慣例になっているんだ。今回だけは特別にインタビューに応じてくれたのさ。まぁ、応じてくれた理由は教えてもらえなかったけどな」
「そうだったのですか……」
王太子様……一体どんな方なのだろう？
「とりあえずリビングへ行かないか？　お茶でも飲みながらインタビューの話をしよう」
ニコリと笑うオリバーさん。
「またオリバーは勝手に話を進めて……あ、そうだ。アゼリア。電話はアゼリアのお父さんからだったよ。明日十三時に迎えにくるそうだ。僕にも会ってお礼を言いたいって言われてしまったよ」
するとオリバーさんは目を見開いた。
「な、なんだって!?　アゼリアの父親から!?　それに迎えって、どういうことなんだよ！」
オリバーさんがヨハン先生に迫る。
「お、落ち着けって。とにかくリビングで話をしよう」
咎めるヨハン先生。
「お湯が沸いたら持っていきますね？」
「ありがとう、ケリー。よろしく頼むよ」

「はい！」
笑顔で見つめ合うヨハン先生とケリー。
やっぱりこのふたりはお似合いかもしれない。天涯孤独でかわいそうなケリー。私がこの世を去ったあとも、どうかあなたには幸せになってほしい。
そう、切に願った――

私たちはリビングのソファに座って、ケリーが淹れてくれたお茶を飲みながら話をしていた。
「それでアゼリア、両親と暮らすって……本当なのか？」
向かい側に座ったオリバーさんが神妙な面持ちで尋ねる。
「はい、そうです」
「家はここから遠いのか？」
「ヨハン先生のお宅からだと馬車で一時間以上はかかりますね」
オリバーさんが髪をクシャリとかき上げた。
「くそ！　馬車で一時間か……自転車ならどれくらいかかるんだ？」
その言葉にヨハン先生が驚く。
「オリバー。自転車って……まさか会いに行くつもりなのか？」
「当たり前じゃないか！　そんなのは当然だろう？　ヨハンはひょっとしてアゼリアに会いに行かないつもりだったのか？　ずいぶん冷たい男だな？」
オリバーさんがイライラした様子でヨハン先生を睨む。
「そんなことは一言も言ってないじゃないか」
「オリバーさん、落ち着いてください」
ケリーがオリバーさんを窘める。
「あ、ああ……すまなかったな。悪い、ふたりを驚かせてしまったか？」
オリバーさんが謝ってきた。
「いいえ、私なら大丈夫ですから」
「そっか、アゼリア。ありがとな。それでヨハン。お前はどうなんだ？　アゼリアがここからいなくなってもいいって言うのかよ？」
「うん、明日アゼリアのお父さんが馬車で迎えに来ることになっているのだけど……おそらくエテルノ家は侯爵だから専属の主治医がいると思う。けど僕は……」
ヨハン先生は顔を上げて私をじっと見つめる。
「僕は……ずっとアゼリアの主治医でいたい。アゼリアさえよければ」
ヨハン先生の言葉が心に響き、胸がギュッと締めつけられる。私はいつもヨハン先生に助けられてばかりだ。余命わずかな私には恩返しする時間もないのに。
「ヨハン先生……」

どうして私にそこまで親切にしてくださるのですか……？
でも、その言葉を口にできない。そんなことを言えば、涙が溢れてしまうから。
「そういえばアゼリア様のご両親は病気のことをご存じなのですか？」
ケリーが尋ねてきた。
「スターリング侯爵夫人には病気や余命のことは話してあるけれども……まだ私の口からは伝えていないの。ただ、病気のことは知ってるみたいだったわ」
「僕も電話で少しアゼリアの病気のことは話しているよ。余命についてはまだ話していないけどね」
ヨハン先生の言葉にオリバーさんが口を挟んできた。
「おい。さっきから余命、余命って言ってるけど……一体なんのことだよ？　アゼリアが病気なのは知ってるけど余命ってどういうことだよ？　まさか……命に関わる病気なのか？　いずれよくなるんじゃないのか？」
「「あ」」
私とケリー、ヨハン先生が同時に声を上げる。
そうだった……誰もオリバーさんに、はっきりと余命のことを話していなかったのだ。
そのことを忘れていた。それに、オリバーさんも私に気を遣って病気のことを聞いてこなかったのだろう。

オリバーさんは無言でじっと私を見つめている。その瞳は不安げに揺れていた。
「アゼリア……どうする？　病気のこと、オリバーに伝えるのか？」
ヨハン先生が心配そうに尋ねる。
「はい。お話しします」
だってオリバーさんはこんなにも心配してくれているのだから。
私はオリバーさんを正面から見つめた。
「オリバーさん……私の病気のこと……聞いてください」
「わ、わかった……」
オリバーさんはゴクリと息を呑むと、うなずいた――
「う、う、ううう……」
オリバーさんはうつむき、肩を震わせて嗚咽している。まさか、ここまで悲しむとは思っていなかった。
「「……」」
ヨハン先生もケリーも沈痛な面持ちでオリバーさんを見つめている。
「あ、あの……オリバーさん……？」
声をかけると、オリバーさんが顔を上げて袖で目をゴシゴシこする。

「アゼリア……俺に……俺に何かできることはないか？　アゼリアの願いだった両親は見つかったけど、他に何か望みはないか？　俺にできることならなんだってしてやるぞ？」
オリバーさんは必死の眼差しで私を見つめてくる。本当に、なんていい人なのだろう。
ヨハン先生が私に視線を向ける。
「アゼリア、そういえばもうひとり捜したい人物がいると言っていたじゃないか。とても大切な男性なんだろう？」
「ええ。そうです。『カイ』というお名前の人ですよね。たしか今は二十二歳になっている男性とおっしゃっていましたよね？」
ケリーはなぜかうれしそうだ。
「ええ。そうだけど……？　ケリー。よくそんな細かいこと覚えていたわね？」
ケリーの記憶力に感心してしまった。
「え？　若い男？　マルセルじゃなくてか？　アゼリア、元婚約者以外にも交流があった男がいたのか？」
オリバーさんがなぜかイラついた様子で尋ねてくる。
「はい。カイという男性には私がフレーベル家にいたとき、とてもお世話になったんです」
再び、カイと過ごした記憶が蘇る。
カイ……今、どこにいるのだろう？　元気で暮らしていればいいのだけど。私の命が尽きる前に、

もう一度会って、今までのお礼とお詫びを伝えたい……
「ふ～ん。そうか……あ、そういえば今日インタビューした王太子様も二十二歳って言ってたな」
オリバーさんの話に、ケリーが目をキラキラさせた。
「王太子様ってどんな方ですか？　私のような者には、一生お会いする機会はないでしょうけど、素敵な方なのでしょうね？」
やはりケリーも興味があるのだろうか？　いや、この国の王太子様なら誰でも興味を持つかもしれない。だって雲の上の存在なのだから。
「あ、そうだ。写真撮ってきたんだぜ。掲載は断られたけどさ。みんなに見せるために急いで現像してきたんだよ」
オリバーさんは手元のカバンを引き寄せ、写真を探し始める。
「え～と……？　あったあった。この人だよ。彼がカイザード・アークライト王太子様だ」
そして写真をテーブルの上に置いた。
「え……？」
その写真を見て衝撃を受ける。
う、嘘……
そこに写る人物は……カイだった。



第二章　カイザード・アークライト

僕――カイザード・アークライトは、フレーベル家へ向かう馬車の中にいた。

「長かった……アゼリア。ようやく君を救い出すことができるよ」

ポツリとつぶやき、ここに至るまでの出来事を思い起こす――

先祖代々二百年以上続くアークライト王家には、「たとえ王族といえど、驕り高ぶることなかれ」という家訓がある。そのため、王位を継ぐ者は国民の立場に立ち、国民の気持ちに寄り添える国王となるべく教育を受けることになっていた。

まず、王族という身分を隠すため、王立アカデミー学院初等部を卒業すると同時に、中等部からは外国へ留学させられる。そして通常は二十二歳で卒業する外国のアカデミーを、十八歳までに卒業するように英才教育を受けていた。

無事に卒業できれば、ようやく帰国の許しを得られる。

そして、ここから一番肝心な『任務』が課せられるのだ。

その任務とは、四年間身分を隠して平民として働き、生計を立てること。

決して途中で身分を明かしたり、断念したりすることは許されない。もしこの決まりを破った場

合は王位継承権を剥奪されて追放という厳しい処分が下されるのだ。
そして僕は四年前、この慣例に従い、十八歳で外国のアカデミーを卒業し、帰国したのだった。

『父上、本日無事に帰国しました』
王都からほど近いリナリアの町に着くと、すぐに駅舎にある事務所から、父に電話をかけた。
『お帰り、カイザード。いや……カイ。無事にかの国のアカデミーを卒業したのだな？』
『はい、そうです』
『よし、それではここからが本題だ。この電話を切り次第、四年間は一切の連絡を禁じる。もちろん護衛もつかない。お前は今からこの国で四年間一般市民として働いて生活するのだ。無事に務めを果たし終えたら、そのときこそお前を正式に王太子として迎え入れる。わかったな？』
『はい』
父の言葉に改めて身が引き締まる。大丈夫、自分の身を守るための護身術は身につけているし、僕が王族であるということは世間には隠されている。一般人として暮らしていくことくらい容易だ。
『いいか？　お前の代わりになる者たちは他にもいるのだからな？　それを肝に銘じておくのだ。ただし、くれぐれも危ない真似はしないように。目立たず、騒ぎを起こさないように真面目に働いていれば四年などあっという間だ。そのころにはお前は、この国の王にふさわしい人物になっているだろう』

『はい、頑張ります。四年後……必ず城に戻ってみせます』
『期待しているぞ』
そして父との電話を終えた。その後、父から教えてもらった職業紹介所へ早速赴く。
『お名前はカイ・ブラウンさんですね？　身分証明書はお持ちですか？』
受付の女性が尋ねる。
『すみません。身分証明書はありません。外国からの移民希望でこの国に来たばかりなので』
父に教えてもらった通りに答える。
『なるほど……移民の方だったのですね。身分証明書がない場合は、お仕事のご紹介に制限がかかってしまいますが、それでもよろしいですか？』
『ええ、もちろんかまいません。どこか働き口はありますでしょうか？　できれば住み込みで、食事つきの職場がいいのですが』
百オルトしか持ち合わせがなかった。たったこれだけでは一晩の宿を借りることすら難しい。
『あ、ありましたよ。フレーベル伯爵家が御者の求人を出しております。衣食住が約束されていますよ。場所もここから割と近いですね』
受付の女性はその場で紹介状を書いてくれた。
『ありがとうございます』
お礼を述べて、紹介状を受け取ると、早速フレーベル家へ向かった。

その家で、僕は緑の瞳が特徴的な美しい伯爵令嬢と出会うことになる。
アゼリア・フレーベル。彼女に――

屋敷の筆頭執事の男性にエントランスで自己紹介しただけで採用され、すぐに同じ御者仲間になる先輩が現れて馬繋場へ連れていかれることになった。
『よろしくな。俺はロイ。二十八歳だ。お前、名前は？』
歩きながら、挨拶された。
『僕はカイです。十八歳です』
『そうか、カイって言うのか。よろしくな。でも助かったぜ。こんなに早く御者が見つかって。大体このフレーベル家の使用人たちは定着率が悪いからな～』
『え？』
その言葉が気になった。
『おっと、なんでもない。聞かなかったことにしてくれ。何、この屋敷の旦那様と奥様、それとモニカお嬢様に気に入られれば居心地のいい働き場所になるはずさ』
『……はい』
返事をしたが、ふと思った。
……使用人たちの定着率が悪いなんて、職場環境が悪いか、ひょっとするとフレーベル伯爵家は

格下の人間を見下す貴族なのではないだろうか――と。
馬繋場に到着すると、赤毛の先輩を紹介された。
彼の名前はトニー。年齢は二十五歳だった。ふたりの先輩は気さくな性格で、これから四年間一緒に働くには、悪くない人たちに見えた。
その後、先輩たちは町の地図を見せてくれる。フレーベル家の人たちがよく行く場所などを教えてもらったり、馬の世話や馬車の掃除の仕方を教わったり……採用初日からいきなり仕事をすることになるのだった。

二十時になり、使用人専用の食堂で食事を終え、ようやく自室に入って休む。
『ふぅ……それにしても採用された日から働かされるとは思わなかったな……』
ベッドに横たわるとため息が漏れた。
あてがわれた部屋は木のベッドが一台、小さなテーブルに椅子が一脚、そしてワードローブ付きだった。南向きで日もよく当たるし、一介の使用人の部屋としてはまぁまぁの処遇と言えるかもしれない。
『労働時間は八時間で交代制か……そして三日おきに回ってくる当直……』
天井を見ながらポツリとつぶやく。
御者は普通の使用人達とは違う。屋敷の主たちから命じられれば、いつでも馬車を出せるように

待機していなくてはならない。そのため、当直の場合は馬繋場の隣にある仮眠室で寝泊まりすることが義務付けられていた。

『当直手当が一回につき、五百オルトか……』

この金額が妥当かどうか、まだよくわからないが、これから四年間雇ってもらうのだから精一杯努めよう。

だけど、ひとつ気がかりなことがあった。

――『大体このフレーベル家の使用人たちは定着率が悪いからな～』

ロイ先輩の言葉が蘇る。あれは一体どういう意味だったのだろうか……？

この屋敷の御者として働き始めて一か月が過ぎた。仕事にも大分慣れ、今日も朝から厩舎で馬の世話をしていた。

『おい、カイ。こっちへ来てカードゲームでもやらないか？』

トニー先輩が手招きする。

『いえ、遠慮しておきます。今は勤務時間なので』

馬に餌を与えながら返事をすると、トニー先輩はつまらなそうに言った。

『なんだよ、つまんねー奴だな。どうせ俺たち御者なんてほとんど仕事がないんだからよ』

『言われてみれば、たしかにそうですね。毎日ご主人様たちを乗せて目的地へお連れするのが、御

者の役目だと思っていたのですが』

それは採用された次の日から疑問に思っていたことだ。

『ああ、そうなんだ。旦那様のダミアン様は屋敷内で仕事をしているし、奥様もモニカお嬢様もほとんど屋敷から出ないしな。毎日出かけるのはアゼリア様だけだが、あの人は別だからな』

『え？　アゼリア様って誰ですか？』

初めて聞く名前だ。でも……素敵な名前だと思った。

『あ……そうか。お前は新入りだから、まだ知らなかったんだな。アゼリア様はフレーベル家の長女さ。もっとも旦那様や奥様たちと血の繋がりはないけどな。だからこの屋敷で冷遇されてるんだよ』

『え……？』

その話に驚いた。

血が繋がらない？　養女で冷遇なんて……

使用人たちに噂されているくらいだ。相当辛い目に遭っているに違いない。……かわいそうに……

『あ、噂をすればなんとやら……だ。アゼリア様が来たぞ』

トニー先輩が厩舎の外に目を向けた。

『え？』

先輩の視線を追い……初めて彼女を見る。遠目なので、よくわからなかった。
けれど、栗毛色の長い髪が印象的な少女だった。そして真っ白な制服。あれは……
『もしかして……アカデミーの生徒……？』
僕のつぶやきが聞こえたのか、先輩がうなずく。
『ああ。そうらしいな。でもそもそもアカデミーって、どういう場所なのか俺は詳しく知らないけどな。何しろ学問なんか、学んだことないし』
そうか、知らない市民がいてもおかしくない。
アカデミーは世界各地にあるが、試験問題は難しく、相当頭のいい人でなければ入学できないのだ。でもそこに通っているということは、彼女はかなり優秀に違いない。
アゼリアはこちらを見もせずに、スクールバッグを持って正門へ向かっている。
『……一体どこへ行くつもりなのだろう？』
首をかしげると、トニー先輩が言った。
『は？　何言ってるんだ。アカデミーへ行くに決まってるじゃないか』
『え？　だったらなぜ馬車を使わないのですか？』
『当たり前だろう？　アゼリア様は旦那様たちからフレーベル家の馬車の使用を禁じられているんだから。そういや、お前に言い忘れていたな』
トニー先輩は僕を見て言った。

『いいか、カイ。絶対にアゼリア様を馬車に乗せるなよ？　どんなに頼まれてもだ。もし乗せたことがバレたら、俺たち全員ただじゃすまないからな。この屋敷で働いていたいなら、アゼリア様を無視するんだ。わかったな』
『え……？』
辛い目に遭っているに違いないと思ってはいたが、まさか馬車を使わせないなんて……！　トニー先輩の言葉に息を呑んだのだった。

早いもので、フレーベル家で御者として雇われて半年が経過していた。
その間に僕はフレーベル家の人たちを乗せて馬車を走らせたことが何度もあった。けれども、やはりそこにアゼリアの姿はない。
先輩たちからフレーベル家の使用人がアゼリアを無視しているという話を聞かされたときは、半信半疑だった。普通に考えれば、そんなことはありえない。
けれども彼らがアゼリアを完全に無視しているのは本当だった。
それだけじゃない、使用人たちがアゼリアを馬鹿にしていじめていることも知ってしまった。
しかし、僕はまだ一度も彼女と接触したことがなかったので、どうすることもできなかった。
そもそもアゼリアは馬繋場へ来ることがなかったのだ。
彼女は真っ白なアカデミーの制服を着て、いつもまっすぐ前だけを向いて馬繋場の前を通り過ぎ

ていた。
僕はなす術もなく、アゼリアを見つめるだけ。
彼女のどこか寂しげな表情。
なんとかアゼリアを助けてあげたい。
日に日にその思いが募っていった。

それはクリスマスの出来事だった。
突然アゼリアが僕らの前に現れたのだ。彼女は馬繋場に来るなり、頭を下げた。
『お願いします。どうか私を馬車に乗せてください。帰りの馬車まではお願いしませんから！』
その顔は今にも泣きそうで、見ているこっちが辛くなるほどだった。
『冗談じゃない。なんでアゼリア様のために馬車を出さなきゃならないのですか？』
『通学用の辻馬車を使えばいいでしょう？』
ふたりの先輩たちは口々に言う。
僕は新人で一番年若いということもあり、先輩たちに対して何も発言できなかった。それに、僕がアゼリアの願いを聞き入れたら、彼らが罰を受けるのだろう。
フレーベル家では使用人の誰かがミスをすれば、その部署の全員が連帯責任として厳しい罰を受けていた。その現状を何度も目にしている。フレーベル家の人々の機嫌を損ねるだけで、命取りになりかねない。だからこの屋敷では使用人の定着率が悪かった。
『今夜はクリスマスの夜なので学生用の辻馬車は出ません。お願いします。もう時間がないのです！』
アゼリアの目にはうっすら涙が浮かんでいる。
いくらフレーベル家の本当の娘じゃないとしても彼女は伯爵令嬢だ。それなのに使用人に敬語を使って、頭を下げている。
こんなこと……普通じゃありえない。
だけど、今の僕は平民に過ぎないから、何を言ったとしても、彼女を救うことができない。それに、ここで何かことを起こせば、王位継承の資格を失ってしまうかもしれない。今まで十二年間、努力に努力を重ねて頑張ってきたことがすべて水の泡になってしまう。
ごめん……！　アゼリア……！
もう彼女の顔を見ることもできずに、視線を逸らした。
『今夜の仕事はもう終わりだし、クリスマスだから一杯やりにいくか』
ロイ先輩が口を開く。
『よし、それはいいな。カイ、お前も行くだろう』
トニー先輩が声をかけてくる。
『は、はい……』

どうしようもない罪悪感にさいなまれながら返事をした、そのとき――
『お願いです。足を怪我して歩けないのです！』
その声は涙声だった。
え……？
足を止め、初めて正面から彼女を見つめた。
アゼリアは小刻みに震えながら、助けを求めるようにこちらを見つめている。まるで宝石のように光り輝くグリーンの瞳には、涙が浮かんでいた。
……なんて美しいんだろう……
非常事態にもかかわらず、頭の片隅で思った。
結局、先輩たちに猛反対されながらも、僕はアゼリアを馬車に乗せることにしたのだった。
ごめんなさい、先輩……
だけど僕はいずれこの国の王になる身。目の前で助けを求めている少女ひとり助けられなくて、どうして国王になどなれるだろう？
これで問題が起こって王位継承の資格を剥奪されても悔いはない。アゼリアを助けなければ、という気持ちが勝った。
『大丈夫ですか？　アゼリア様』
アゼリアを馬車に案内するとき、彼女は真っ青になっていた。相当足が痛かったのだろう。

『……失礼します、アゼリア様』
アゼリアを抱き上げた。
『キャアッ！』
突然抱き上げられたからだろう、彼女は悲鳴を上げる。
『ご無礼をお許しください、足が痛むのでしょう？』
アゼリアを抱きかかえて馬車に乗り込むと椅子に座らせた。
『ありがとう、カイ……』
うつむきながら小さな声でお礼を言うアゼリアの顔は真っ赤になっていた。
フフフ……可愛いな……
アカデミーのクリスマスパーティーにアゼリアを連れていくために、僕は馬車を走らせた。
そして、この日を境に僕とアゼリアの内緒の交流が始まったのだった。
クリスマスのあの一件以来、自然とアゼリアの姿を目で追いかけるようになっていた。
毎朝アゼリアがアカデミーへ行く時間、わざと厩舎の外で馬の手入れをするようにした。そうすれば必ず彼女に会うことができたから。
アゼリアはそんな僕に笑顔を向けてくれる。そして僕も笑顔で応える。決して手を振るなどはしない。
『どうか私にはかまわないで。もし誰かに見られたら、私もカイもただではすまないだろうから』

そうアゼリアに言われたからだ。
たしかに何か事件を起こしたら、僕の立場は危うくなる。けれどもそれ以上にアゼリアが罰を受けるほうが、ずっといやだった。だから僕たちは視線を交わすだけ。
ただそれだけだった。
そしてその関係はアゼリアがアカデミーを卒業するまで続いた。

それはアゼリアがアカデミーを卒業する年のことだった。使用人たちの食堂で昼食をとっていたとき、背後からメイドの会話が聞こえてきた。
『ねぇ、聞いた。アゼリアの話』
『ええ。聞いたわ。例の話でしょう？』
まただ。フレーベル家の使用人たちはアゼリアのことを陰で呼び捨てにしている。
なぜ、そこまでひどいことができるんだ？　たとえ養女だとしても彼女はれっきとしたフレーベル家の令嬢なのに……！
だけど、それ以上に今はメイドたちの会話のほうが気になった。一体何の話をしているのだろうか？
『何々？　アゼリアがどうしたって言うのよ』
別のメイドの声が聞こえた。

『え？　やだ、あんた知らないの？　アゼリアが婚約したって話』
なんだって!?　アゼリアが……？
カチャッ！
思わずフォークを取り落としてしまった。
そんな……アゼリアが婚約だなんて……
見知らぬ男の手を取るアゼリアの姿が脳裏に浮かび、胸が苦しくなる。
『え？　誰と婚約したのよ！　そんな相手アゼリアにいたの？』
そうだ、一体誰だ？　アゼリアが婚約した相手っていうのは……
『なんでもアカデミーの先生のご子息らしいわよ？　たしか……ハイム伯爵家だったかしら』
『そういえば、生意気にもあの女……頭がよかったみたいだしね』
このメイドたちはどうしてそんな偉そうな口を叩けるのだろう？　アカデミーに通学していることが、どれほどすごいことか、わかっているのだろうか？
よほどの天才か、相当努力をしなければ入学など不可能に近い。そんなことすら知らずに、彼女の悪口を言うとは。自分たちもアカデミーに入学できる頭脳を持っているとでも言いたいのか？
メイドたちの話はまだ続く。
『だけど旦那様も奥様もモニカ様も、その婚約を認めたくないそうよ』
『まぁ、そうでしょうね～。何しろモニカ様は頭が悪すぎて、貴族社会から爪弾(つまはじ)きにされているっ

てもっぱらの噂だものね』

『だから奥様は言ってたわよ。絶対にふたりの婚約の話を潰してやるって。ここだけの話だけどね……どうやらアゼリアの婚約者を奪って、モニカ様の婚約者にしたいみたいなのよ』

モニカ……あのワガママ令嬢を婚約者にするつもりなのか？

だけど、そううまくいくとは思えない。

『おい、カイ。いつまで食事してるんだ？　そろそろ休憩時間は終わりだ、早く食っちまえよ』

一緒に昼休憩に入っていたロイ先輩に声をかけられて我に返った。

『あ！　す、すみません』

慌てて残りの食事をかきこみ、空になった食器を持って立ち上がった。

アゼリア……本当に君は婚約してしまったのか……？

彼女に直接確認したい。しかしそれが真実だったとしても、今の僕にはどうすることもできない。

なぜかわからないけれど、胸の奥がズキリと痛んだ。

アゼリアが婚約したという話を聞いて、数日が経過した。

最近、彼女の姿を見かけない。

アゼリア……一体どうしてしまったのだろう？

彼女のことが気がかりでならなかった。

その日の昼の休憩時間、僕はどうしてもひとりで過ごしたくて、フレーベル家の裏庭に来ていた。

町で買ってきた最近流行りのサンドイッチを静かな場所で食べたかったからだ。

『ベンチは空いてるかな……』

キョロキョロと見渡していたとき、視線が止まる。

『え……？　あれは……？』

そこにいたのはアゼリアだった。

彼女はまるで木の陰に隠れるかのように芝生の上に座っている。

アゼリア……

どうしても彼女に話しかけたくて、周りに誰かいないか見回した。幸い、人の気配はない。そこでゆっくり近づき声をかけた。

『アゼリア様？　こんなところで何をしているのですか？』

『え!?』

アゼリアはビクリと肩を動かし、恐る恐るこちらを振り向いた。目が潤み、目の周りは赤くなっている。

『あ……こ、こんにちは。カイ』

アゼリアは目をゴシゴシこすりながら笑顔で挨拶してきた。

『ひょっとして……泣いていたのですか？』

『え？』
途端にアゼリアは困った顔をした。
しまった！　僕は、使用人なのに伯爵令嬢であるアゼリアになんてことを言ったのだろう。
『すみません！　出すぎたことを言ってしまいました』
慌てて頭を下げる。
……アゼリアと対等に話したい。
自分の今の立場が恨めしかった。
『いいの、謝らないで。カイ。……泣いていたのは事実だから……』
アゼリアは寂しげに笑った。
『差し支えなければなぜ泣いていたのか話してくれませんか？　あ！　絶対に誰にも話しませんから安心してください！』
『……ありがとう。カイは優しいのね』
アゼリアはますます寂しげに笑う。
……なぜだろう。アゼリアは婚約したはずなのに、少しも幸せそうに見えない。
そのとき。
キュルルル……
可愛らしい音が聞こえてきた。

『え？』
驚いてアゼリアを見ると、真っ赤になってうつむいている。
『アゼリア様……？』
『あ、あの！　今のは……どうか聞かなかったことにしてもらえる？』
まさか、ひょっとして……
アゼリアを見つめると、彼女は僕が何を考えているかわかったのだろう。ますます顔を赤らめた。
『実は私が個人的に雇っているメイドに食べ物を買ってきてもらったのだけど……だ、だめにしてしまって食べられなくなってしまったの。それでお腹が空いてしまって。は、恥ずかしいわ』
『だめにしたって……？』
アゼリアは泣いていた。
よくよく見ると、服の上からでもわかるほど痩せている。
まさか……！
『アゼリア様、食べ物をだめにしたっておっしゃいましたが、本当は誰かにだめにされてしまったのではないですか？』
アゼリアの細い肩がビクリと跳ね、無言でコクリとうなずく。
なんてことだ……！　アゼリアがハイム伯爵令息と婚約してから、ますます彼女に対する当たりが強くなっているという使用人たちの話は伝わってきていた。

『アゼリア様、もしよければ僕と一緒にここでお昼を食べませんか？』
『え……？』
アゼリアは顔を上げて僕を見る。神秘的で美しい彼女のグリーンの瞳は、僕の姿をはっきり映し出していた。
そしてこの日から僕たちはときどき、裏庭でこっそり会って一緒にお昼を食べるようになった。
あと二年、今の生活を我慢すれば僕は王宮へ戻る。
二年後……もし君がまだこの屋敷にいるのなら、そのときは僕が……
密かにそのときが来るのを待った。
だけど……ついにあの瞬間が訪れてしまった。
今になって激しく後悔している。あのとき僕が我慢していれば、アゼリアはあのとき以上に不幸な目に遭わなかったかもしれないのに。

それは小雨がシトシトと降り続く肌寒い日曜日のことだった。
十三時。僕は先輩たちと一緒に馬繋場にいた。
『う～、今は四月だっていうのに、朝から降っている雨のせいで肌寒いな……』
トニー先輩がカップに注いだコーヒーを飲みながらブルリと震えた。馬車の中の掃除をしているとロイ先輩が声をかけてくる。

『おい、カイ。今日は日曜だし、この雨だ。ご主人様たちは馬車に乗って出かけることはないだろうさ。真面目に仕事する必要ないぜ。それより、焚き火でもして温まろう』
『お？　焚き火ですか？　いいですね。それじゃやりますか。古新聞取ってきますよ』
トニー先輩がカップを傍らのテーブルに置くと、納戸へ向かった。
『カイ、屋根のある外で焚き火しようぜ。お前も手伝えよ』
『はい』
ロイ先輩に呼ばれて、ふたりで準備をしていると、馬繋場の前をアゼリアが傘をさして正門へ向かう姿が目に入った。
……どこかへ出かけるのだろうか？
普段は見慣れないワンピースを着ている。
『……アゼリア様』
思わずつぶやくと、ロイ先輩が振り返った。
『ああ、今日は日曜だから婚約者の家にでも行くんじゃないのか？　辻馬車を拾ってな』
楽しそうに言うロイ先輩を睨みつけたくなる衝動を抑え、彼女を見つめる。あれではせっかくの外出着が濡れてしまう。足元だって汚れるし、泥が跳ねるかもしれない。
アゼリアの身体は小さく、傘をさすその姿は震えているように見えた。コートすら着ていないので、相当寒いだろう。

『マッチも持ってきたから早速焚き火しましょうぜ』
トニー先輩が古新聞を持って戻ってきた。
『ああ。そうだな。ほら、カイ。お前も手伝え』
先輩たちがアゼリアを気にも留めないのも腹立たしかった。
もう我慢できない……！
『僕はもう、アゼリア様を馬車に乗せるって決めましたよ』
先輩たちにきっぱり言った。
『なんだって⁉』
『おい、カイッ！　お前、正気か⁉』
ふたりは驚きの表情を浮かべる。そんな彼らの返事を背に、アゼリアを目指して駆け出す。
『アゼリア様！　今日もハイム家へ行くのですか？』
背後から声をかけると、アゼリアが笑顔で振り向く。
『ええ、そうよ。これから辻馬車乗り場へ向かうところなの』
そして彼女は僕が傘をささないで駆け寄ってきたのを気にして、自分の傘を差し出した。その行動に胸が熱くなる。
自分が濡れてしまうのに、使用人の僕を気遣うなんて……！
『いけません、そんなことをしてはアゼリア様が濡れますよ』

『だけどわざわざ雨の中来てくれたから……。それで何か私に用があったの？』
どうしてそんな言い方をするのだろう？
僕が御者なのはわかっているのに。
『何か用があったの、じゃないですよ。お出かけするならなぜ僕に声をかけてくれないのですか？　辻馬車乗り場に向かうまでにお召し物が汚れてしまいます。馬車ならお出ししますよ？』
どうして僕に命じようと思わないのだろうか？
『だめよ、あなたに迷惑はかけられない。今日はみんな屋敷にいるのよ？　私を馬車に乗せたことがバレたら、あなたがどんな罰を受けるかわからないわ。知っているでしょう？　私が馬車を使うのは禁止されていると。風邪を引くといけないから、もう戻って』
まだ僕のことを気遣っている。
……寒そうに震えるアゼリアを見ていると、自分の不甲斐なさに腹が立ってくる。もう、これ以上譲れない。
『だったら僕と一緒に馬繋場へ来てください。このままじゃ僕は雨に濡れっ放しですから』
『カイ……』
ようやくアゼリアは、ついてくることを了承してくれた。
『ありがとうございます！』
彼女の役に立てることがうれしい。

アゼリアを連れて馬繋場へ戻ると、焚き火のそばでカードゲームをして遊んでいたロイ先輩とトニー先輩が案の定、口々に文句を言ってきた。
『カイ！　なんでアゼリア様を連れてきたんだよ！』
『ああ、まったくだ。旦那様たちにこんなことがバレたら、俺らまでひどい目に遭わされるぞ？』
『何を言っているのですか？　アゼリア様だってフレーベル伯爵家の令嬢ではありませんか！』
どうしてアゼリアの前でそんなことを言えるんだ？　背後に立っているアゼリアを振り返ると、案の定真っ青な顔で立ちつくしていた。
『お前なぁ……もうフレーベル家に来て二年になるんだからいい加減に学習しろよ。アゼリア様に関われば、俺らの立場が危うくなるんだぞ？』
『ああ、とばっちりはごめんなんだよ』
ロイ先輩はアゼリアがいるにもかかわらず、ポケットから煙草（たばこ）の箱を取り出して一本くわえ火をつける。
令嬢の前でタバコを吸うなんて……！
怒りで顔がカッと熱くなる。
『……やっぱり私は帰ったほうがよさそうですね。お休みのところ、申し訳ございませんでした。失礼いたします』
だが、アゼリアの悲しげな顔が僕を冷静にさせた。

立ち読みサンプル
はここまで

そうだ、ここで腹を立てても仕方ない。今は一刻も早くアゼリアをハイム伯爵家に連れていってあげなければ。
アゼリアは背を向けると馬繋場から離れていく。アゼリアを引き止めるため、慌てて彼女の左手を握りしめてしまった。
アゼリアが驚いた顔をする。
しまった！　つい、うっかり触れてしまった。
『あ！　す、すみません。勝手にアゼリア様に触れてしまって！』
慌てて手を離したが、顔が熱い。すると、先輩たちが呆れた表情で言う。
『おいおい、本気かよ。令嬢に憧れるのはわかるが、アゼリア様はやめておけ』
『アゼリア様は捨て子だから。どんな下賤な血が入っているかわかったものじゃないぞ？』
ふたりの言葉で、とうとう我慢の限界に達してしまった。
『なんだと……？』
自分でも驚くくらい低い声で、ふたりを睨みつける。
『なんだよ。カイ……やる気かよ？』
トニー先輩が立ち上がる。
『おもしれぇ……。前々からいい子ぶっていて気に入らなかったんだよ』
ロイ先輩は吸っていた煙草を地面に投げ捨て、足で踏みつぶした。